

国際主義戦士緑川英子の遺児の人生

中年にして帰国、二つの祖国を結ぶ絆に

澎湃新聞・記者 李聞鶯

【訳註. 李聞鶯記者は訪問団のハルピン東方烈士館、佳木斯式典、牡丹江、そして最後の訪問地長春まで随行取材を続けてくれた記者です。はるばる上海から駆けつけた、上背があり髪の高い20代の女性記者。取材と共に、各地での暁子さんの宿泊先を手配し、夜は暁子さんへの取材を重ねたことが記事に窺うことができます。記事というよりルポルタージュ大作です。上海の『澎湃新聞』というのは未知ですが、おそらく普通の新聞形式というよりタブロイド誌のような、さまざま角度から「新聞」(ニュース)をじっくり取り上げる刊行物と推察しています。A4版で華字にして19頁(但し、写真5葉入り)、取材力も構成力も並々ならぬものがあります。中国の知識青年が長谷川テル女史と二つの祖国をもつ長谷川暁子さんをどのように受け止め、中国の読者にどのように伝えたかったのか、大変興味をもって全文翻訳いたしました。果たして、中国の読者とくに若い読者がどのように受け止めたか、これまた大変興味深いことです。ともかく李記者の熱い気持ちと努力には頭が下がります(TY)】。

彼女は幼い頃は中国で「日本っ子」と呼ばれていたが、長じて日本国民となった。「私は時代というものの申し子なのかも。幼い頃は『烈士の遺児』として大きな庇護を受け、長じてからは『二つの祖国』を持つ者として時に葛藤することもあるわ」と語る。中国では「劉曉蘭」と呼ばれ、「東方紅 太陽昇」を歌いながら、恵まれた正規教育を受けて成長した。中年に達したのち日本に渡り、「長谷川暁子」と呼ばれる中国語教師となった。「長谷川」というのは母の姓である。



〔写真；緑川英子〕

中国抗戦史には緑川英子という一人の日本女性が記されている。彼女は日本語で世界に向かって反戦の声を響かせたことによって、自分の祖国から「嬌声売国奴」と罵られた。この女性こそ劉曉蘭の母であり、本名長谷川照子というエスペ란ティストであった。抗戦勃発前夜、彼女は中国からの留学生劉仁と結婚、夫に従って戦火飛び交う中国に向かったのである。

1947年、緑川英子と劉仁は佳木斯でこの世を去ったが、6歳の劉星と1歳にも満たない劉曉蘭の兄妹が残された。運命の伏線はこのように敷かれ、中国と日本の血を分け持つ二人の子供が中国で成長し、日本との交わりを生み出し、二つの国を取り結ぶ懸け橋となったのである。

訪問団



〔写真；劉曉蘭、母緑川英子の墓碑を拭う〕

「誰彼となく、あなたは中国と日本のどちらが好きなのと聞かれますが、私は中国も日本も愛しており、どちらかを捨てるということなど到底できません」。9月15日、吉林長春、日本への帰国前夜、長谷川暁子は記者に次のように語った。「好きと愛するとは少しちがいますね。好きというのはやや単純な傾向を帯びるものです。日本は静かで、清潔で、生活に便利だから好きだ、というように。それに対して、愛するというのはもう少し深く、複雑な感情、例えば少々の欠点があるから愛せないかといえ、とてもそんなものじゃあないわよね」。これが近く70歳を迎える老婦人の心境なのだった。

彼女は1946年4月瀋陽で生まれ、90年代に日本に定住することとなったが、現在でも日本人そのものかと問われれば心もとない。「言葉、習慣、思考どれをとってもどこか違うところがある、これはどうしようもないことなの」と語る。彼女は数えきれないほど中国にやってきているが、2015年9月抗戦勝利70周年にあたって、その意義にふさわしいことを願って、日中友好協会大阪府連合会のメンバーと共に訪問することになった。訪問団総勢19人、年齢は55歳から80歳、全員が平和を熱愛し、日中両国の友好を願う日本各界の人士。訪問団の山本恒人団長は次のように語った。「日中友好協会大阪府連合会は7月1日、日中不再戦・平和友好集会を開催しました。参加した450名は『国際主義戦士緑川英子』の事績を学ぶことによって、日本の侵略戦争を反省し、日本が再び戦争の道を歩むことは絶対に許さないという決意を固めました」。緑川英子の娘長谷川暁子もこの集会で講演を行っている。彼女は語った。「幼いころから、たとえどんなに楽しいときでも、どんなに幸せだった時にも、ずっと自分の心の中のある暗い陰りを拭い去ってしまふことができませんでした。その陰りとは日中関係です。毎年夏になりますと、『戦後処理問題』、

『歴史教科書問題』、『靖国神社参拝問題』、または『領海権問題』と恒例行事のように繰り返されてきました」。彼女はそれらの問題を心から憂い、現在の日本の政権が平和への道筋を逸脱してしまっていると思っている。平和への共通する願いと緑川英子への敬慕の念から、長谷川暁子と訪問団一行は9月11日ハルピン空港に降り立った。



〔写真：9月13日、長谷川暁子と訪問団の記念撮影〕

一行の中国訪問はハルピン・一曼街の東北烈士記念館に始まり、一路、方正、佳木斯、牡丹江、長春へと続く。これらの地域は長谷川暁子が半世紀以上に幼少期を過ごし、多少とも知り尽くした場所である。それはまた劉曉蘭としての、烈士遺児としての成長の軌跡が記された歳月なのであった。

孤児

劉曉蘭の人生の記憶は牡丹江幼稚園から始まる。その時、彼女の傍らには兄がおり、毎日遊んでくれ、生活のすみずみで面倒を見てくれた。ある日突然その兄の姿が見えなくなったのである。劉曉蘭は保母さんに「お兄ちゃんはどこへ行ったの?」と尋ねた。保母さんは「学校に入学したのよ」と答えた。何日も問い続け、そしてもう問うのをやめてしまった。1948

年、劉曉蘭が2歳、兄劉星7歳の頃のできごとである。かれらの両親、劉仁と緑川英子は一年前にあいついで佳木斯でこの世を去り、兄妹は孤児となっていたのである。



〔写真；劉曉蘭と兄劉星〕

兄が去って間もなく、劉曉蘭はハルピン・馬家溝にある孤児院に送られた。それは白樺と柳の樹に囲まれた小さなレンガ造りのビルに置かれ、当時、幹部の子女を受け入れていた特別保育園である。お城のような建物の中で劉曉蘭は何も自由なく幼年期を過ごすことができた。何より彼女には「母親」がいた。当の保育園園長であり、劉曉蘭は「園長ママ」と呼んでいた。園長ママは表向き厳しい先生であったが、心優しい女性だった。毎週末になると園児たちはセダンに迎えられて家路につく。その後は、園長ママは制服を脱いで普段着に着替え、劉曉蘭一人だけのママになってくれるのだった。

中ソ関係が蜜月にあった1950年代、ハルピンは「東方のモスクワ」と讃えられ、市内随所に美しい欧風建築が立ち並んでいた。「園長ママ」は愉しそうに劉曉蘭を連れだしては、映画を観たり、教会堂を見学したりし、夜になると同じベッドに寝かせてくれるのだった。母の愛に満たされた日々は4年近くにおよんだが、1952年夏、6歳になった劉曉蘭はハルピン市東北烈士子弟小学校に入学することになった。

それは東北抗日聯軍の有名な将軍、元松江省・省長馮仲雲が烈士子女の生活問題を解決するために創設した学校で、多い時には100名以上の烈士遺児を受け入れていた。学校は東北烈士記念事業管理処の管轄下に設立され、現在の東北烈士記念館近くにある白い石造りの二つのビルに置かれた。

劉曉蘭は語る。「新中国建国初期、国は豊かではありませんでしたが、東北烈士子弟小学校の遺児たちは普通の孤児たちに比べれば天国にいるようでした。皆、衣食住の愁いなく、先生の授業を受け、省や市の指導者たちがよく視察にいられていました。でも、そのための莫大な経費は当時の政府にとって過酷なものだったのでしょう。数年後には大多数の遺児たちは実家に送り返され、引き受け手のない20名ほどの孤児たちだけが残されました。私もその一人。残った子たちには引き続き特別の待遇が与えられ、朝食にはピロシキと牛乳が出され、昼食夕食にはご飯や麺類、包子が並びました。父母の栄光のおかげで、子供たちはいつも学校を代表して各種の社会活動に参加しました。男の子は『レーニン服』を着用、女の子は綺麗なワンピースを着て、陽光を浴びながら共産党や毛沢東を讃える歌を歌い、まさに『紅色の少女時代』でした」。

兄妹

父母を早くに亡くしたとはいえ、幼い劉曉蘭は孤独を感じたことはほとんどなかった。ハルピン・馬家溝の保育園には彼女を可愛がってくれた園長ママがいた。東北烈士子弟小学校には多くの同級生たちや、彼女を溺愛してくれた女の先生もいた。劉曉蘭が特別待遇を受けるにあたってのキーパーソンは、建国初期の重要指導者の一人、高崇民であった。前世紀の30、40年代、高崇民は一貫して抗日救亡活動に携わった。彼は重慶で東北救亡総会を担い、劉曉蘭

の父劉仁は同組織の機関誌「反抗」の編集長を務めた。新中国成立後、高崇民は東北人民政府副主席、最高人民法院東北分院院長、東北行政委員会副主席等の要職に就いている。劉仁が亡くなったことを聞いて、高崇民は二度にわたり佳木斯に赴いてその墓地を探すとともに、二人の子供を「烈士遺児」として認定したのである。劉曉蘭は語る。「私は一度も高崇民先生にお会いしたことはありません。文革の時期到北京にある先生のご自宅を訪ねたことがありますが、隣家の人はこの家がすでに没収されてしまったと教えてくれたのです。1971年高崇民先生は迫害の中で亡くなり、1979年に名誉回復されました」。劉曉蘭に高崇民のことを教えてくれたのは叔父劉維だった。

小学5年の時、劉曉蘭の前に一人の見知らぬ男が現れ、彼女を家に連れ帰り冬休みを過ごさせたいと申し出た。この人が劉仁の弟劉維、当時、吉林省農業科学研究所主任だった人である。「まるで天から降ってきたような」叔父と会って、劉曉蘭はどうしてよいかもわからなかったが、傍にいた校長は「曉蘭、良かったじゃないか、君には親戚もいるし、兄さんだっているのだ」と言った。兄さん、それは劉曉蘭にとっては記憶の遥かかなたの人だった。かすかな記憶の底には一人の男の子が傍にいたようなのだが、ある日「消えてしまった」のだった。その時劉星を連れ去ったのが劉維その人だったのである。劉仁は亡くなる直前、二人の子を弟に託した。当時は家計も苦しく、劉維は先ず「劉家の跡取り」に当たる甥を連れ帰り、状況が好転すれば姪っ子を引き取ろうとしたのである。兄さんに会えるという一心で、劉曉蘭は叔父とともに公主嶺へと向かった。叔父の奥さんと4人の子供たちが彼女を迎え入れてくれたのだが、どうしたことか兄の姿はなかった。叔母はあなたの兄さんは離れた場所で学校に通っており、手紙では「重点大学」の受験準備に追われており、帰

省できないという手紙が届いている、と告げた。結局再会できたのは2年後のことである。中学1年の夏休み、劉曉蘭は再び公主嶺に帰ったが、駅に降り立つと、従兄と一緒に眼鏡をかけた青年が改札口に立っていた。「私が劉星だ」と眼鏡の青年が手を差し出した。劉曉蘭はついに11年ぶりに兄との再会を果たしたのであった。この休暇中、劉曉蘭は兄の話に夢中になって時を過ごした。兄はとても勉強家であり、朝は庭で英語とロシア語を学び、昼は新聞を読み、午後は小説を読みふけている姿が劉曉蘭の目に焼きついている

60年代、兄は北京大学に合格したが文革時期に「反動学生」とされてしまい、四川省江油に下放され、80年代到北京に戻って仕事に就いた。「兄は私などよりずっと苦労したが、独立独歩、思考する人だった」。その後の人生で、劉星はずっと劉曉蘭の模範であり、精神的支えとなっている。

「小日本」

次々と現れた身寄り、劉曉蘭にとって自分が何者かを知る機会となった。兄と出会った夏休み、劉曉蘭と叔父の隣家の子供とが些細なことで言い争いとなった。その子は突然、「お前のような汚い日本の鬼っ子を誰が相手にしてやるか」と大声で罵った。その時、劉星が飛び出してきてその子を平手打ちにしたのである。後の禍を畏れて叔母は直ちに隣家の親に平謝りに謝った。実際、劉曉蘭は日本人の血をもつことの悩ましさを早くも体験することになったのである。ハルピンの馬家溝保育園の園長ママは曉蘭に「あなたは混血で、日本人の血をもっているのよ」と教えてくれていた。それが日本との関わりを知った最初であったが、両親のどちらが日本人なのか、どうしてそうなのか、これからどうなるのか、さっぱり分からなかったのである。

東北烈士子弟小学校の教科書には日本の侵略者が犯した恐るべき罪行が書かれていた。放課後、生徒たちは白いシャツに青いズボンをはいて、赤いネッカチーフを首に巻き、すぐ隣の東北烈士記念館の清掃に努め、愛国宣伝活動に参加した。日本軍が中国にもたらした苦難を見て、劉曉蘭は身の毛もよだつ気分となり、自分自身への疑問もますます湧いてくるのだった。同級生たちだけは彼女に日本の血が流れていることを知っており、女生徒たちは曉蘭を「日本っ子」と呼んでいた。この呼び方には当時何の悪意もなかったとはいえ、石礫のように劉曉蘭の心には突き刺さって来るのだった。

小学4年生の時に、日く言い難い事件が起こった。学校では艱難辛苦を思い起こす教育活動が始まり、労働模範が招かれて生徒たちへの報告が行われた。その労働模範の婦人の夫は抗日遊撃隊の隊長であったが、子供は日本軍に殺され、12歳にも満たない娘は強姦され、行方が分からなくなった。ここまで話して婦人は泣きはじめ、生徒たちも泣き始めた。突然、一人の男子生徒が劉曉蘭を指さして、「こいつの家は日本の鬼の家だ。こいつも日本っ子だぞ」。わずか数秒の出来事であったが、劉曉蘭には長くつらい時間だった。彼女はその報告会がどのように終わったか全く思い出せないが、その晩の夕食が喉を通らなかったこと、そして校庭の物陰でむせび泣いていたことだけは覚えている。探しにやってきてくれた先生は、「あなたのお母さんは確かに日本人だけれども、決して悪い人ではないのよ。そうでないとあなたはこの学校にはとても入れなかったわ」と慰めた。

数年後、この先生の話は叔父によって裏付けられることになった。隣の子との騒ぎのあった日の晩、叔父は甥と姪を前に次のように語ったのである。「君たちのお母さんは確かに日本人だが、抗日に参加した日本人なのだ。君たちのお父さんも尊敬に値する人だ。君たちは両親のこ

とを誇りに思わないといけないよ」。叔父が差し出した黄ばんだアルバムには劉曉蘭の両親の結婚記念写真、さらに夫妻が東京、横浜、重慶で撮った写真が貼られていた。「父は背が高くスマートで気魄に満ち、母はやせ細ってとくに重慶の時はそう写っていた」。それは劉曉蘭が生まれて初めて得た父母のイメージであり、まるで見知らぬ人のようでもあったのである。

出自

とくに身近なものではなかったにせよ、叔父が話してくれたことはやはり二人の子の父母に対する関心を募らせたのだった。劉星は叔父にもっと詳しく教えてほしいと頼んだことがあったが、叔父はそれを控え、ただ彼らの両親がもはやこの世を去り、佳木斯に葬られているとだけ語り、写真をはじめ遺品が残っているが、大人になってから渡してあげよう、と言った。劉曉蘭は後になって、叔父が当時日本に留学したという経歴だけで「右派」と決めつけられ、非常に困難な境遇に陥ったことを初めて知った。それは劉曉蘭が学生時代の最後に叔父の家を訪ねて間もなく、叔父一家は公主嶺を追われ、僻地での労働改造に送られた時である。20年後に自由の身を回復した叔父は甥に遺品を返している。その中には、七言絶句が書かれた赤い絹の布が含まれている。それは1941年郭沫若が緑川英子を励まして贈った題詞であった。「周囲は暗闇に閉ざされ茫茫たり、星は天にあって美しく瞬くも、遠く雪に映えるのみ、灯一閃して書を照らすを喜ぶ」。兄妹は80年代にこの歴史的価値をもった遺品を佳木斯市博物館に寄贈している。

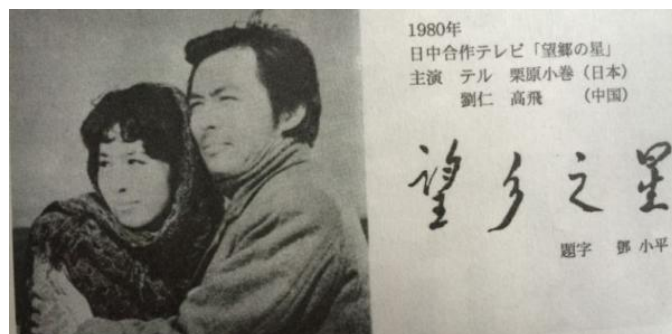
1961年春節、劉曉蘭は劉仁の2番目の弟、劉維箴の家で過ごした。叔父の家は遼寧省本溪の橋頭鎮にあり、劉仁の実家でもあった。「大した文字も書けない私は君の父さんとは比べものにならない」、これはその叔父がいつも言ってい

たことである。実際には、毛筆が巧みで、仕事も良くできたからこそ、三年大自然災害の時も一家十数人の糊口を凌がせた人物なのだった。劉曉蘭は叔父を通じて橋頭鎮の劉家が大家族から成り立っていたことを知る。曉蘭の祖父劉漢臣は、若い頃に中国で商売をしていた日本人と馴染みの間柄であり、結構日本語ができた。大人になって家業を継ぎ、薬局を経営したり、食用油加工工場を開いたりして、長男劉仁と次男劉維を日本に留学させたのである。1938年、秘密裏に抗日活動に従事していた劉漢臣は日本軍に殺害される。劉曉蘭によれば、祖父の死は悲惨なもので、麻袋に放り込まれて鉄棒で滅多打ちにされて殺されたが、最後まで日本人を罵り続けたという。

劉曉蘭は橋頭鎮で意外な人物と出会うことになった。叔母（劉維箴の妻）が「その方はあなたの『お母さん』なのよ」と言った。劉家の長男劉仁は13歳の時、「童養媳」（息子の嫁にするために他家から引き取って育てる）を娶っていたのである。劉仁より5歳上の娘であり、彼との間に女の子が生まれている。劉曉蘭の実母緑川英子がこのことを知った時は、劉仁と結婚して何年も経っており、二人の間には劉星がいた。元の配偶者は劉家でずっと暮らしていたが、劉仁の新家庭にはそれほどの波紋をよんだわけではなかった。父母が亡くなって後、劉星は先ず劉維叔父と生活を共にし、その後、この異母姉を頼っている。この姉は惜しくも30歳代で亡くなってしまったが、劉星と曉蘭兄妹はそれぞれ老いた義母の面倒を見ることになる。1970年代、劉曉蘭は義母を呼び寄せて8年間生活を共にしたのである。曉蘭はこの老人に問いかけたことがある。「父のことを恨んだことはないの？再婚は考えなかったの？」。彼女は「あなたの父さん以外、一緒になっても良いと思うような人には巡り会えなかったよ」と答えた。

望郷の星

父母とは結局どんな人だったのだろう。1980年、「望郷の星」というテレビドラマが放映されたが、これによって劉曉蘭は大体のところではあっても両親の全体像を理解できたといえよう。放送された時、劉曉蘭は大西北にいた。



〔写真：テレビドラマ「望郷の星」〕

1964年、彼女は唐山鉄道学院の電機学系に合格し、電機技師となることを夢見ていた。静かな大学生活は二年と続かず、文革が始まって大学も「非常事態」におかれることとなった。それは理性が狂気にとって代わられる時代であった。劉曉蘭はこれを避けて図書館にこもったが、人々の眼には「読書に埋没する」異分子と写った。卒業間近となって「大字報」に問題学生と書き込まれ、劉曉蘭と後に夫となる恋人とは、卒業分配で蘭州鉄道局の中衛分局に配属され、同地の鉄道子弟学校の教師となったのである。学校には4人の大学卒業生がいたが、中衛にはテレビが一つもなく、父母に関わるテレビドラマを見るために汽車で2時間、省都銀川まで出かけたのである。このテレビドラマによって劉仁と緑川英子は多くの人々に知られるようになった。

1934年、24歳の劉仁は日本に渡り、東京高等師範学校（現筑波大学）に入学した。英語を専攻し、東京にあるエスペラント学習班で21歳の緑川英子と出会ったのである。「緑川英子」

はエスペラント語で書かれたペンネーム「ヴェルダ・マーヨ」（緑の 5 月）を日本語に直した名である。劉曉蘭によれば、母は奈良女子大に学んだが、早い時期に奈良県の左翼文化組織に加入し、後にエスペラント語の翻訳に力を注いだという。1936 年、緑川英子は家族の反対を押し切って劉仁と結婚した。間もなく、日本軍の中国全土侵略の野望があらわになり、劉仁は祖国存亡の危機に手を拱いていることを潔よしとせず、帰国を決心した。緑川英子もまた中国に向かう船上の人となったのである。彼らの中国生活のスタートは上海であった。二人は上海エスペラント連盟に加入し、同時にエスペラント語の雑誌『吼える中国』の創刊に積極的に携わった。

1937 年 8 月 13 日、上海で「淞滬会戦」の火蓋が切って落とされた。この全てを目撃した緑川英子はエスペラント語の散文詩「愛と憎しみ」を書き、侵略者の残虐な行為を糾弾している。「美しい都市が廃墟に変わろうとしている。大勢の婦人や子供たちが屍の山となっている。不幸にも中国人民を虐殺している将兵もまた日本のファシストの犠牲となっているのだ」。上海陥落後、劉仁夫妻は広州、武漢、重慶へと移り、緑川英子は国民党中央宣伝部国際宣伝処の日本語アナウンサーの一人となった。「こちらは中国放送局であります。只今から日本の将兵の皆さまへの放送を始めます」。毎晩 7 時、柔らかく正確な日本語の声電波を通じて各地へと響いていった。放送の中で緑川英子は同胞に促した。「あなたがたの熱い血を間違えて流してはなりません。あなたがたの敵は海を隔てたこの地にはいないのです。無垢の人々を殺める者は必ずや自分自身を死に追い詰めてしまうことでしょう。正しい愛国心は他民族を尊重する精神と決して対立するものではないのです」。

キラ星 落つ

何年経ってからも、劉曉蘭はいつも思う。当時の境遇のもとで母は一人の日本人としてどのように生き抜いたのであろうか。1938 年 11 月、日本のメディア『都新聞』は「嬌声売国奴の正体：流暢日本語を操り、祖国に毒づく。赤くすれ長谷川照子」と題する記事を発表した。日本の父一家は罵詈雑言を浴び、家の戸口には「売国賊」と書かれた紙片が貼られた。「自決せよ」という脅迫文書を送りつける者もあった。それにもかかわらず、緑川英子は中国で彼女の理想と事業を追い続けたのである。

武漢陥落後は重慶に移り、一方で対日宣伝を続けながら、他方で東北救亡総会の雑誌『反攻』の編集、印刷、発行に参画した。彼女は郭沫若をはじめ文化人とともに常に街頭宣伝に立ち、重慶郊外にあった日本将兵捕虜に対する教育では平和の大切さを説いた。抗戦勝利後、劉仁と妻子は上級の指示を受けて、東北復興活動に従事した。彼らは先ずハルピンに赴き、内戦が激化したため佳木斯に移った。夫妻は東北行政委員会の社会調査員に任命され、新たな生活が始まった。

その頃、緑川英子は三人目の子を身籠っていることを知る。すでに二人の子がおり、生活は厳しく、激務に就いていることも考慮して、夫妻は中絶を決断したのである。劉曉蘭によれば、「組織に中絶手術のことを報告したところ、当初、医療設備や医療環境が整っていないという理由で二人の申請は却下されたが、二人は私設医院に出かけて手術を受けた」という。1947 年 1 月、緑川英子は手術の失敗による感染症のため 34 歳でこの世を去ってしまった。愛妻を亡くした劉仁は精神的な打撃を受け、緑川英子の遺体が安置された小屋に閉じこもって日夜泣き崩れ、一カ月後も埋葬を拒み続けた。そして劉仁もまた 1947 年 4 月 37 歳でこの世を去った。

1968 年 1 月、劉曉蘭は文革時の「全国経験

大交流」の機会に佳木斯にある父母の墓地を訪ねた。雪と氷の北国の小都市、彼女は叔父劉維箴の娘を伴って、烈士陵园を三日間探し回ったが、結局見つけることができなかった。がっかりして叔父の家に帰りついた劉曉蘭は病で寝ついてしまい、心空しく過ごしたのだった。

佳木斯を再び訪れたのは 1983 年夏のことであった。上級の指示を受けて、佳木斯市政府は考古学研究者と叔父劉維箴に繰り返し調査を依頼し、劉仁と緑川英子の埋葬地がつきとめられ、改めて二人の合葬墓が建てられた。新たな墓碑は佳木斯の四豊山風景区のダム湖の傍に建てられた。大理石で造られた墓碑には、正面に黒龍江省陳雷省長の直筆で「国際主義戦士緑川英子と劉仁同志の墓」と題詞が書かれ、墓碑の背面には二人の事績を讃える碑文が刻まれている。

蜜月期

中日関係の回復は劉仁と緑川英子の墓碑を改めて天下に衆知しただけでなく、劉星と劉曉蘭の人生にも転機をもたらした。1980 年、鉄道部は劉曉蘭を北京での仕事に呼び戻し、新しい所属を北京二七工作機械廠とすることを通達した。ほとんど同時に、劉星も四川から北京工業大学の教師に招かれた。ほどなく劉星は日本に留学し、一年後に帰国した。1984 年、劉曉蘭も日本留学の道に踏み出すこととなる。40 歳近くなつての日本留学は劉曉蘭についていえば、突然の成り行きというわけでもなかった。幼き日から大人になるまで、「日本」というものは常に意識せざるをえないものであって、彼女の心の中にわだかまっていた。少女期には同級生に内緒で、ハルピンで働いていた日本の残留婦人のところをこっそり覗きに行ったりもしたのである。少し大きくなって、日本の本当の状況や母の祖国にはまだ家族というものがいるのかどうかなど、関心は募るばかりであった。

1976 年に文革が収束すると、日本の役所宛

に手紙を書き、親族を探そうと試みてもいた。2 年後、日本からエスペラント友好代表団が北京を訪れたが、代表団の中には劉曉蘭の実の叔母がいたのである。緑川英子の姉長谷川幸子である。叔母と面会したのは首都国際空港であった。叔母が彼女の手を取って、涙を流しながら「曉蘭とテルはまるでそっくり」と言った時、劉曉蘭は自分が日本人の子であることを確信した。中日関係が注目を集めていた 70 年代、緑川英子の子と日本の親族とが面会を果たしたという出来事は社会的事件として、中日友好時代の幕開けを象徴するかのよう受け止められたのであった。1979 年、日本のエスペラント学界、文化芸術界、政界等の人々からの援助のもとに、劉曉蘭と兄は日本訪問の旅路についた。

初めての日本についての記憶はそれほど芳しいものではなかった。劉曉蘭は日本語が分からず、しかも初めての出国であり、人混みや車の洪水、繊細な日本料理を見て、頭に血がのぼり、水さえ喉を通らなかつたほどであった。面白いことに十日後に北京に戻ると、不適合症状は影も形も消え失せ、心身ともに正常に戻った。初めての訪日表面をなぞっただけに終わったのだから、劉曉蘭が母の祖国をもっと知りたいと願うのは当然のことであった。5 年後、2 年半に及ぶことになった留學生活を送るため、彼女は再び日本へと向かった。

長谷川となる

1984 年、2 度目の訪日、劉曉蘭はやはりしっくりとはいかなかった。劉曉蘭は当時電気通信大学でコンピューター情報学を学んでいたが、遠い親戚に間借りをしていた。この遠い親戚は社会活動家でいつも学費の募金集めに彼女を連れだした。「皆様のご配慮に感謝いたします」。中年を迎えた劉曉蘭は日本語で澁みなくこの言葉を繰り返すのだったが、自尊心は傷つけられた。中国では父母こそ失ったとはいえ、「烈士遺

児」という身分からくる特殊待遇を享受することができた。文革時期には、彼女と夫は条件の厳しい大西北にあっても、自力で生活をやりくりしてきた。だが日本では、彼女はよそさまからの援助に頼らなければならない、これは苦痛だった。劉曉蘭は自分の無力さを思い知らされるとともに、自尊心と感情が傷つけられ、要するに惨めな気持ちを抑えきれなかったのである。

彼女は親戚に、休みを使ってアルバイトで学資を稼ぎたいと申し出たが、キッパリと断られた。「留学生が仕事につくのは違法だし、緑川英子の娘が日本でお金を稼ぐなどというのはあってはならないことだ」。その結果、彼女は親戚の家を出て中国留学生のために作られた宿舎に入り、アルバイトと勉強に精を出すことにした。難題は解決されたのである。1984年、劉曉蘭は北京に帰った。おりしも、中国では改革開放によって大きな果実がもたらされていた。人々の懐は豊かになり、テレビ、冷蔵庫が庶民の家に備えられ、万元戸は美談となり、ますます多くの人々が出国し、これまでとは異なる生活が体験されるようになった。

関亜新・張志坤の『日本孤児調査研究』によれば、1972—1980年の間に、172名の日本の残留孤児がその家族660名と共に日本に定住している。日本厚生省の「医療衛生・社会保障部門、現在の厚生労働省」の統計では、1985—1995年の間に残留孤児1468名がその家族5899名と共に日本に帰国し、定住している。劉曉蘭の頭にも日本定住への思いが募り始めた。彼女は日本の居住環境への好感を否定しないが、それよりも心の中に積もり積もった「日本への思い」から発した願いだった。この感情は同じ混血児の劉星だけがよく理解できたのだと言えよう。兄妹は相談し、日本と中国の血を半分ずつ持っているのだから、一人は日本へ、もう一人は中国に残るとするのが道理であろうということになった。1989年4月、劉曉蘭は三度日

本へと向かった。彼女は学習と労働の生活に入り、同時に緑川英子の娘として日本国籍回復の申請を行った。5年後、国籍申請は認可された。40数年劉曉蘭として過ごしてきた彼女は、もう一つの祖国で長谷川暁子という人間として後半生を始めたのである。

この十数年、劉曉蘭は大阪で生活し、主に大学で中国語を教えている。彼女は母のような光眩い人物とはならなかったが、あくまで平凡にそして質素に暮らしている。「もし私があのような時代に生まれていたら、母のように振る舞えたでしょうか」。劉曉蘭は、今の私は静かな日々に満足し、時間が許せば旅に出かけている。旅することは青年時代にはとてもできなかったけれど、捨て去ることのなかった夢だったし、晩年になって夢が実現するとは考えられもしなかった、と語る。

二つの祖国

たとえ万里を駆け巡ろうとも、劉曉蘭が立ち止まって思うのは兄のことである。1996年劉星は55歳にして癌を患い北京で亡くなってしまった。昔日、命を支え合った兄妹の一人は先に父母のもとへと旅立ってしまった。劉曉蘭の眼には兄は勇敢そのものであり、祖国への愛もより深いものがあった。彼女自身について言えば、「二つの祖国」をいかにして繋ぐかという課題を常に考えている。この数年、中日の友人たちから何度も頼まれて、戦争中の「中国人労働者の強制連行」問題、「従軍慰安婦」問題、「人体実験」問題の調査に関わってきて、半世紀以上も前のあの戦争がもたらした傷が未解決のままにきていることを理解した。

このような感覚は今回の旅にもやはり感じている。それは訪問団一行が9月12日に方正の中日友好園林を訪れた時のことであった。2011年、方正の政府は日本の開拓団の犠牲者のために慰霊碑を建てたということで、厳しい

糾弾を受けたのである。今なお争いのもととなる墓碑撤去の声があり、園林の大門は固く閉ざされ、「警戒」、「不安」の懸念は打ち消されていない。「もともと簡単な追悼式を行う予定であったが、結局とりやめとなった」。劉曉蘭は「中国人の憤りも日本人の心情も理解できる」と語る。戦争が中国人にもたらした傷は筆舌に尽くしがたいものがあるが、同様に祖国に帰ることのできなかった日本開拓団犠牲者の戦争悲劇も深刻である。

年齢と経験とがもたらす作用なのかもしれない。劉曉蘭の父母への思いにも真実味が増してくる。彼女は次のような文を寄せてくれた。「私は父母への理解が進むにつれて、彼らの気質、品性、人格、さらにはそれらが形成した勇気と正義感とは決して特異な、というものではなく、また彼らの性格にある強靱さ、頑固さ、我が道を貫く等の、ある種の欠点すらも、同じように極めて普通のものであると思うようになった」。

劉曉蘭は2年毎に佳木斯を訪れている。ある時は訪問団と共に、大体いつもは一人か親戚をともなって。2009年の訪問時、市政府は劉仁と緑川英子の墓碑を市街に程近い佳木斯烈士陵园に移転させ、さらに多くの人々が参観・慰霊することができるようになった。劉曉蘭は「佳木斯の夏が好きで、大体三日間滞在し、早朝には自由市場に出かけ、活気に満ちた屋台や小店で大好きな東北の食べ物を戴く。午後には花屋で花束を二つ買い、ひとつを革命烈士記念碑に、もう一つを父母に捧げる。清掃してくれる人に出会おうと歩み寄ってお礼を述べ、陵园管理人の方とお昼をご一緒する」、と語る。

2015年9月13日、2年ぶりの訪問であった。真っ青な好天に恵まれ、劉仁と緑川英子の墓前には、はるばる訪れた19名の日本の友人が深い追悼の念を表し、さらに「不再戦」の信念を誓った。劉曉蘭はその日のために用意した布を取り出して、墓碑の隅々を拭いながら呟

っていた。まさにそれは母との対話を思い起こさせるものであった。劉曉蘭は語る。「死の床にあって故郷には帰れない。母はどんなに寂しい思いをしたことでしょうか。父母生前の仲良しの友人は、緑川英子は亡くなる直前、熱にうなされながら日本語ばかり呟いていたが、一番はっきりと聞こえたのは『お母さん』だった、と教えてくれたのです」。佳木斯の街を穿つように松花江が流れている。その情景は母を思い起こさせる。1945年8月15日、日本の無条件降伏の日、重慶にあった緑川英子は長江のほとりに散歩に出かけた。彼女はたった一人、脚を川面に浸しながら、無言のまま長江の流れ下る東方を見つめ続けていた。劉曉蘭は、母の当時の心情はきっと非常に複雑なものだったにちがいない、と思うのだった。